

サハラ時代の追懐

—いたわり、くつろぎ、他者への愛—

佐々木晃彦

20 代の後半 4 年間でモーリタニア回教共和国で暮らしました。半世紀以上も前になります。面積は日本の約 4 倍で、国土全体がほぼ砂漠です。ひっそり閑としたサハラの夜を、星は夜の灯となって照らしていました。そんな日に、いつものラクダ革の草履で出かけた海辺の帰り途、押し詰めた小さな声で「ムッシュー」と語り掛ける人がいました。その声は木の骨組みをヤギの皮で被った、組み立て・持ち運びが簡単なテントから聞こえました。近づくと、30 歳前後と思しきご婦人です。私には、そう見えました。しきりに「お茶を飲んでいいかないか」と勧めます。大量の砂糖で甘くし、ミントで味付けをしたお茶は、遊牧民の生活にリズムを与えていました。それにしても、知らない方です。このご婦人、今は海岸の傍で過ごしていますが、つい先日まで奥地で暮らしていたことに疑いはありません。

遅い時間だったのですが、ご婦人は熱心に誘って下さいます。その気持ちを無下にしたくありません。その思いやりをお受けすることにしました。他者を気遣い、他者とユツタリとした時を過ごそう。いたわり、寄り添い、幸福を願う・・・そんな気持ちに溢れていました。アラブの家庭には来客をもてなすという特徴があります。どの家庭も来客があることを常に期待しています。客を厚くもてなすことは、シェム(セム族の祖)のテントからイスラム世界の最末端にまで広がる美德です。それが故にイスラム教徒は、あらゆる点で他民族、他教徒にとって一つの模範となっています。それは砂漠の不安定さに依拠しておりました。



厳しい自然と対峙してきた遊牧民には、人とのお付き合いを大切にする慣習が永く続いています。旅をする人を泊めてあげた時は、道中の生活と安定を確かなものにするため、テントの前の火を絶やさない。守るべき慣習の一つです。イスラムの相互扶助の教え、ユダヤ教徒やキリスト教徒を差別しない寛容な心、平和の精神を説く姿は、世界で約 20 億人のイスラム教徒(2024 年)に根付いています。ご婦人はホスピタリティの中で、その美德を最大限に発揮していました。無意識の偏見がある排外主義の進む国では考えられないことです。人との出逢いを大切にする 50 数年前のサハラに私は、DEI(D: Diversity=多様性、E: Equity=公平性、I: Inclusion=包括性)を感じておりました。私は手招きするご婦人に従いました。

彼らは何を大切に生きてきたのでしょうか。毎日の生活のなかで、出来るだけ多くの時間をあてがいたいと考えているのは、勤勉に働くことでも、楽しく遊ぶことでもありません。働くこと、遊ぶことにも気を及ぼすのですが、人生の大事がそこにあるとは考えていません。それらは、どちらかと言えば小事です。彼らが大事にするのは、やすらぎであり、休憩であり、明るいうちとりの中で生色を得る幸せ感です。そこに見られるのは他者への愛です。他者の喜びを願う自然な欲求です。いつでも何処でも、「いま・ここ」に在るご婦人と私は、「共感の能力」に委ねます。私たちはリラックスしてお喋りを楽しみ、お茶をご一緒していました。ところが、です。ご婦人が急に静かになりました。緊張感が漂います。そして、「実は家に娘がいるのだが・・・」と語りかけてきたのです。真剣な眼差しで「その子と見合いをしないか？」とも。合縁奇縁とは言いますが、このお申し出、余りに唐突です。何よりもイスラム教徒の女性は、それ以外の男性とは結婚できないのでは？

でも、「いま・ここ」から身を引いて立ち去ることなど不躰で出来ません。この世に生まれていること、誰かに会うことは奇跡に近い縁です。遊牧民の文化が分かっていない、社会経験も乏しい 20 代の外国人です。失礼のない振る舞いが求められます。取り敢えず提案を受け入れることにしました。ほどなくして少女が現れました。年齢は 10 歳だと言う。日本なら小学 3 年生か 4 年生。サハラでは 10 歳で結婚し、30 代で老婆さんになるのが珍しくないことは知っていました。しかし、それはサハラでの話です。児童婚は児童の権利を侵害する行為として、奴隷制度廃止補足条約に違反します。児童の性的虐待とみなされれば「児童性虐待罪」として刑事罰の対象になります。



若し、少女を伴って日本に帰れば、税関で「私の妻です」と説明しても、犯罪行為と判断されるでしょう。ご婦人を気落ちさせることなく、丁寧にお断りしなければ・・・。「これから二人で話し合ってね」。そう告げると彼女は席を立ち、15分ほど二人だけにさせられました。しかし、この間、二人に会話はありませんでした。少女は殆どフランス語が分からず、私は現地の言葉に疎かったからです。意思疎通が蜗牛の歩みなら、結論は見えています。

サハラの社会単位が家族であることは知っていました。数百年もの間、安全と安定を保障してくれる政治組織がなかったサハラです。社会的単位としての家族が重要であることは、サハラで暮らし始めていた私にも理解ができました。あれから50数年、当時を思い巡らしております。ご婦人は私を家族として迎えたかったのでしょうか。サハラの親しい友人が「あなたの名前を、モクタール・ウルド・ササキにしよう」と提案したことを思い出します。



写真説明：首都ヌアクショットの郊外でも、おもてなしを受けました。

参考文献：片倉もとこ『イスラムの世界観』岩波書店、サニア・ハマディ著・笠原佳雄訳『アラブ人の気質と性格』サイマル出版会、キンチョイ・ラム作・くまがいじゅんこ訳『移動する民』玉川大学出版部、佐々木晃彦「晩学の文化経済学を思う」（財）昭和経済研究所、アラブ・スタディーズ・月報、2025年3月号。



プロフィール：(ささき・あきひこ)山形県生まれ。1972年～75年をモーリタニア回教共和国第二の町、ヌアディブで暮らす。(社)企業メセナ協議会幹事、(財)東京フィルハーモニー交響楽団評議員、(独立行政法人)日本芸術文化振興基金地域文化専門委員会委員、九州21世紀委員会委員、文化経済学会〈日本〉理事を歴任。著書に『文化産業論』北樹出版、『異文化経営学』東海大学出版会、『豊かさの社会学』丸善ほか。台北芸術大学大学院(台湾、日本の文化産業論)、明智大学大学院(韓国、芸術経営学)特任招聘教授、九州共立大学経済学部名誉教授(文化経済学)。